慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近代日本における「士魂商才」論：竹越三叉『磯野計君伝』を中心に
Sub Title	
Author	西田, 毅(Nishida, Takeshi)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1991
Jtitle	近代日本研究 Vol.8, (1991.) ,p.81- 113
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾における知的伝統
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19910000-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本における「士魂商才」論

——竹越三叉『磯野計君伝』を中心に——

西田　毅

一

近代日本の「実業の思想」を伝統と近代、あるいは欧化と国粋という視点から論ずる場合、「士魂商才」の問題が大きな比重を占めることは否定できない。ここで言う「実業の思想」とは、単純な譲渡利潤の追求や高利貸的商業とは異なった「近代資本主義経済社会の形成・発展をおしすすめた資本家（特に近代の産業資本の成立を指す）の企業家ないし経営者としての事業（ビジネス）についての考え方」[1]（傍点原著）を意味する。

いいかえれば、「商人資本」や政商型富豪と異なるM・ヴェーバーのいう賤民資本主義Paria Kapitalismusを克服した生産者としての「資本主義的経営の人格化」、「資本主義社会形成の主体的モメント」[2]へと商人が主体的変革を遂げている「生産者の思想」、したがって、それは、「実業家をしてそのビジネスに高い目的意識をもたせ、その目的を実現するにふさわしい行動のパターンをうみださせるところの思想」[3]でなければならない。

われわれは、このような資本主義の精神形成に与って大きな役割を果たした実業人として、たとえば、渋沢栄一、中上川彦次郎、武藤山治、大原孫三郎といった代表的な産業資本家の名前をあげることができる。かれらは、いずれも幕末から明治の初期に生をうけて実業界で活躍した人々である。幕末維新の巨大な社会変動と価値体系の転換を経験するなかで、あるいは、「賤民的資本主義」の精神を論語と武士道という伝統的な価値体系の読みかえ（渋沢栄一）によって、また、中上川の三井改革にみられるような、国家の財政に寄食する財閥的政商の廃棄とそれに代る近代的な産業の自主独立思想の模索、さらに、鐘紡王国を築きあげた武藤の生産者的自立的な思考態度をもつ「実業の精神」の強調による国民精神振興の企てなど、個々の事業経営に心を砕くだけでなく大きく近代日本の資本主義社会形成の主体的エトス、生産者の思想の育成に努力した。

小稿でとりあげる竹越三叉の明治屋創業者磯野計論もまさに、このような思想史的脈絡のなかで、その意義を論ずることができるであろう。すなわち、価値転換期の明治日本にあって、若くして、英国留学の機会をつかみ、アングロサクソン的市民精神と士魂の結合の上に立って、官憲に阿附する政商の道を選ばず、封建時代の「前垂掛」的商人の因循、姑息の遺風を脱却して、イギリスのミドルクラスが実業によって自由独立の気象を発揮し、一国の脊髄骨となるのにならって、近代的な自立的商業の宣言をなした磯野計（一八五八－一八九七）の言動は、単なる実業家列伝の枠内でおさまりきらない広がりをもつ。

竹越三叉は、その著『磯野計君伝』において、時代の推移を的確にとらえながら磯野の個性の記述に成功しており、人間磯野の描写のモティーフも、まさに、ここでいう近代日本が最も必要とする「士魂商才の一人物」（竹越三叉）の生成をあきらかにすることにあった。

以下、竹越の著述に拠りながら近代日本と「士魂商才」の問題を考えてみたい。

二

まずはじめに『磯野計君伝』の概要を紹介する。本書〔初版一九三五年(昭和一〇)、四版一九八五年(昭和六〇)、明治屋発行、非売品〕は、明治屋創業五〇年を記念して、三代目社長にあたる後嗣磯野長蔵の依頼をうけて、長蔵と三〇年の交友をもつ竹越が執筆したものである。竹越と磯野長蔵との交わりは交詢社(両者はともに同社の常議員であった)を通じて実現した。[4]

本の体裁であるが、東大時代の級友増島六一郎の碑銘(「題法学士磯野計君碑」)と磯野の大学南校時代の集合写真、そして五代龍作あて英文書簡、関東大震災前の横浜の明治屋とキリンビール初荷出発の光景写真等が最初のグラビアページに印刷されている。続いて竹越の題言と本文合わせて七一ページよりなる小冊子が本書の構成である。

創業記念に創業者の伝記を著名な歴史家に依頼するということから人は、あるいは、通俗的なサクセスストーリーを想像するかもしれない。しかし、通読して本書は、そのような安易な顕彰録とは異質な客観的な明治経済史上の位置付けを意図した本格的な作品であることが容易にわかるであろう。

唯、歴史家として当時定評ある竹越が、本書の執筆を引き受けるについては、相当の理由がなければならない。「題言」で、三叉は、「歳月の逝くこと白駒の隙を過ぐるが如く、故磯野計君往いて已に三十九年、そして明治屋が創立せられてより正に五十年に該当する。後嗣長蔵君、水を飲みて源を思ふの情禁ずること能はず、先考のために碑を立てんことを企だて、そして先考と莫逆の友人であった増嶋博士が、碑銘に代へて古詩一篇を作り之を

石に刻することとなった。余は長蔵君と三十年の交友であり、君の先考につきて聞知する所多きを以て、為めに此小伝を編輯した」と記している。そしてまた、編輯を終えたかれが、「人生は短かし、然どもその事業気魄は永しと云ふ哲人の語を、深く回想する」とも書いている。このように、磯野の「事業気魄」に動かされた竹越が、ここに小品ながら、明治大正期の実業家伝としては出色の作品を生みだしたのである。

唯、始めての磯野伝であるゆえ、資料として何を使用したのかということが問題になるが、竹越はその点に関しては、「一事、一項、皆なその事に因縁ある人に質問し、若くは最も信用ある文書を憑拠とした」と述べている。今でいう関係者、生存者とのインタヴューや成稿の閲読を乞うて成ったのであろう。しかし、かれがいう「信用ある文書」が何であるかという点になると、磯野の商業書簡類を除くとそれは必ずしも厳密とはいえず、出典の明示もない。他の三叉の史論にも共通していえることであるが、いわゆる樽三つに資料を集めるタイプの歴史的リアリズム、もしくは「官学アカデミズムの資料主義に対する対抗意識」[5]も手伝って、かれの想像力を駆使して磯野の人物と精神を描くという特徴が本書にもみられる。加えて、三叉一流の情熱あふれる名筆が、本書の大きな魅力になっていることはいうまでもない。

さて、本書に即して磯野計の生涯と事業を考えてみよう。まず、竹越は、一八八四年（明治一七）八月、磯野が、英国での留学を終えて、郵便汽船三菱会社がイギリスで注文、購入した横浜丸（総トン数二、三〇〇トン）に乗って帰国した時点から筆を起していることに注目したい。竹越が伝記を書くにあたって、その人の誕生、家庭教育から書きはじめるという通常のスタイルにとらわれないのは、横浜に上陸した時点から磯野の「一生の事業」がスタートしたという認識に基づいている。つまり、本書が何よりも実業家としての磯野の人間像を解明することをめざしており、どのようにして、磯野が近代的な実業の精神を身につけるに至ったのか、すなわち、叙述は、

直截に、修学・思想形成から英国留学にいたる背景に進んでいる。

竹越が資料として用いる「勤務中概要」（磯野湊が執筆した覚書）によれば、磯野計は、幕末の一八五八年（安政五）に父津山藩士（一三〇石取り）磯野湊、字昌善、母同藩士太田耕の女の二男として生れた。磯野家は、代々「禄高以上に藩中で勢力ある家柄」で、藩主の祖先松平中将光長が越後に居たときからの旧臣であり、光長の長子綱国が備後に幽閉せられたときも、これに従って流離の艱難を共にし、君臣の関係自ら他の群臣と異なる由緒正しい家系であった。したがって、磯野湊も、武道に励み（進藤流剣術）、熱心に藩主に奉公した「忠誠無二の真士」であった。

磯野計の修学であるが、一八六八年（明治元）、計（幼名計助）一一才のときに、英学修業のために神戸に出て、英学の大家箕作麟祥が開設した学校に入学した。津山藩は小藩ながら、徳川一門の佐幕派を藩主にもつ格式高い藩であり、幕末維新期の日本において、西洋文明移入の先導的役割を果たしたところであるが、箕作阮甫、秋坪、麟祥の名は、津山藩の蘭学、天文学、英学の進展と切り離すことのできない巨名であった。計の父が箕作阮甫や秋坪らと親交があり、藩主の許可を得て計を神戸に送り出した。[6] 箕作麟祥は阮甫の養子省吾の子で、幕末に幕府開成所の教授として活躍、徳川民部大輔に従って欧州を巡遊し、一八六八年（明治元）二月に日本に帰るが、時すでに維新の政変で幕府が倒れて明治新政府が樹立されていた。そこで、麟祥は、当時、兵庫県令であった伊藤博文らの世話で神戸に学校を開き、英語を教授することになったという。[7]

このように、神戸遊学は少年計の志ではなく、父親や母方の祖父の熱意で決められた。計が出発に際して、祖父の太田耕翁が贈った文章（「磯野孫児計助ニ与フ」）がある。そこには、当時、七五才の老境にあった太田が、「西洋学」を志す少年の苦労を思い、なお老軀に鞭うって主君万一の急に応ずる覚悟を述べ、孫が学問成就の上、帰

郷するときは、最早幽明境を異にして再会を期しえないであろうが、「修業中如何様の故障有之迚モ油断ナク一寸ノ光陰ヲ軽ロンゼズ時ニ隣燈ヲ借ル事有リトモ少モ怠ル事有ル可カラズ修行ノ上帰郷セバ即時ニ我墓前ニ来リ拝礼有ル可シ其時修行之至処ノ高下ニ付キ其座ニ賞罰ヲ加エ候」と愛情の中にも厳しい忠告を忘れないところ、まさに、「克己、努力、奮励を以て主義とする封建武士の気象」（竹越）が躍如としている。磯野の思想の背景には、少年期におけるこのような武士的道徳による鍛錬があったことに我々は注目したい。

しかし、磯野の神戸「留学」は、一八六九年（明治二）開成学校教授として麟祥が上京することによって長くは続かず、一旦、津山に帰る。神戸時代の磯野の勉学態度が優秀であったこと、幕府の崩壊と明治新政府の発足による積極的な開国進取の政策の実施にともない津山藩において、磯野の英学修得の評判が大きな渦となって広がり、やがて、藩は、有為の少年七名を選び留学生として東京に派遣することを決めた。磯野はそのなかの一人に選ばれて三人扶持と毎月金一両の学資が与えられることになった。

そのころ、東京には、官立の開成学校（帝国大学の前身）、私立の慶應義塾、三叉学舎（箕作秋坪）、同人社、尺振八の私塾等があったが、津山藩の七人の書生は、同藩の因縁で自然に三叉学舎（日本橋浜町河岸の津山藩邸内）に入学することとなった（一八六九年二月）。神戸の箕作塾ですでに相当の学力をつけていた磯野は、三叉学舎で秋坪の助手として教授の手伝いをしていたが、同校が廃校になるや法律学を講ずる麟祥塾に移った。磯野が麟祥の私塾に在籍していたころ、大島貞益、大井憲太郎、中江兆民らも在学者一五〇余人の中に名を連ねていた。(8)

磯野の東京留学も決して平穏無事ではなかった。すなわち、父湊が郷里津山藩のお家騒動、藩政改革運動にまきこまれ、老藩公（斎民）を動かさんとしたかれは、政敵に捕縛されて「家名断絶」の宣告をうけ、「檻入」（蟄居閉門）の処分がいいわたされた。父の幽閉が磯野の境遇に影響をおよぼさない筈がない。一度は東京留学中止の

議も出たが、藩の長老の好意に助けられて、藩主からも学資金を得て辛うじて学業を続けることができた。磯野は、時に未だ一三才の少年であり、心痛のあまり二度までも自殺を試みたことがあるという。

明治政府は、一八七〇年（明治三）に日本全国の各藩に命じて藩内の秀才を大学南校に官費留学せしむることを定めた。貢進生制度の始まりである。抜擢されて磯野は、貢進生として入学、一八七九年（明治一二）に東京大学（一八七七年改称）法学部を卒業（第二期生）した。法学士の称号を得た磯野は、当時の多数の学生が理想とする官界を選ばず、同期の学友増島六一郎、山下雄太郎、高橋一勝の三人とともに攻法館という法律事務所を設けて弁護士（代言人）の仕事を始めた。増島の言によれば、攻法館ができたとき世間は一斉に睥睨したという。官尊民卑の風潮が強く代言人の社会的地位がきわめて低い時代にあって、それはごく自然な世間の反応といえよう。

なぜ若い前途有望なかれらがこのような道を選んだのか。竹越は次のように説明する。

まず、官吏の俸給の格差の問題。すなわち、磯野らの卒業年次から月俸が以前の卒業生の半額に減額されたこと、そして、攻法館グループに共通の心事として、「英語を解し英国法学に通ずると共に、イギリス人の伝統である自由独立の気風を慕ふことであって、民間にありて官場に入らず、手に唾して事を為すべしと云ふような考が、勇気を与へて茲に至らしめたものならん」[9]と。磯野は、「英国『ミッドル・テンプル』の組織に倣ひ以て他日吾国にも『ミッドル・テンプル』様のものを創設せんとの大志を懐きて攻法館を神田錦町に開設」し、過分の謝礼を貪る悪徳代言人の弊害を除き、報酬は「依頼人の任意」に従い、夜は同館において法律学の教授をおこなったと述べている。[10]

むやみに役所に依頼したり、貴顕の後塵を拝することなく、独立自営の道を歩みはじめた意気盛んな青年たちであったが、しかし、攻法館は長く続かなかった。ここに、磯野の人生に転機が訪れる。すなわち、三菱（岩崎

弥之助）の選抜留学生として一八八〇年（明治一三）から一八八四年（明治一七）にかけて、四年間の英国留学のチャンスが与えられたのである。磯野の推薦者は、三菱に多大の貢献をした豊川良平（一八五二-一九二〇、慶應義塾卒、三菱財閥の最高幹部、岩崎弥太郎の従弟）であり、磯野の他に増島と山下雄太郎の二人が選ばれた。出発が近づいたある日、岩崎弥之助は駿河台の自邸に三人を呼び送別の宴を開いた。席上、磯野は、三菱の援助をうけて洋行できる恩義は深く感謝するが、しかし、自らは決してこの恩義のゆえに、三菱の奴隷にならないと決然と語った。青年磯野の意気たるやまことに旺盛なるものがあった。

さて、磯野は英国で何を修業したのであろうか。岩崎は、三人三様、各自、好むところの学問に励むべしとして特別の注文をつけなかった。磯野は、ミドル・テムプルらの法学院や大学に入学して、正式に法律学を修めず、直ちにロンドンのノリス・アンド・ジョイナー商会 Norris & Joiner Co. に入社して、商務を見習い修業した。この会社は、金融街のシティに事務所をもち、回船業を営む会社で海上保険業務も取り扱うシップ・ブローカーであった。

ロイド・レジスターによれば、ノリス・アンド・ジョイナーという社名は、一八六八年から一九一二年まで四四年間登録されており、その後、社名を幾度か変更して、現在（一九八三年）はマクレガー・コリーウェア・ハウジング社と名のっている。[11]

ロンドンに滞在しながら学校に入らず商社を選んだのは、当時、三井物産ロンドン支店長の渡辺専次郎の影響が大きいという増島の見解をあげて、このように断然、実業界に身を投ずるに至った磯野は、「封建日本の殻を脱して、新しき形相を以て舞台に上らんとする商工日本」の最も優秀なパイオニアであったと竹越は評している。

ノリス・アンド・ジョイナー商会で、見習書記として雑用も含む商務を修得したが、かれの持ち前の「精励、

克己、敢為の気質」が次第に周囲に認められ重役の信任も得られるようになった。そして、かれが、ノリス・アンド・ジョイナー商会を去るとき、商会は記念の金時計を磯野に贈ったが、そこには、Presented to Mr. Hakaru Isono by Messrs. Norris & Joiner as a small token of their esteem on his leaving them. London, 1883と彫られてあり、磯野の人格がいかに高く評価されていたか容易に推測せられる。(12)

ロンドン時代の磯野のパースナリティを示すもう一つのエピソードに、ロンドン在住の日本人会における末松謙澄（一八五五－一九二〇）との対立がある。明治一〇年代のロンドンには、在英公使館員や官私の留学生、そしてごく少数の民間商人らがいたが、かれらの親睦会である日本人会で、談論の機会があると、官吏や給費生の方は末松の議論に就き、私費生や実業家は磯野の主張を支持したという。

末松は、磯野よりも三歳年長で、その文才を福地源一郎に認められ、政府系新聞の東京日々新聞の編集に携わり、やがて、伊藤博文に重用された人物であるが、当時、かれは、英国公使館書記に任命され、政府の費用でケンブリッジ大学に学んでいた。留学以前のかれは、一八七五年（明治八）、黒田特命全権公使に従い朝鮮に使し帰朝後、工部権少丞に任ぜられた。西南戦争のときには、参事山県有朋の幕僚として従軍、また、同年には太政官権少書記官に転じ、一八七八年（明治一一）には、官を辞してイギリス留学をおこなった。明治一三－一四年は、日本国内で自由民権運動が澎湃として起り、薩長藩閥政権と民権派の熾烈な対立は、日本を遠く離れた地球の裏側にいるイギリス在住の日本人社会にも影響を与え、母国の不安定な政情は自らかれらのあいだで熱気を帯びた議論を誘発することになった。末松はごく自然に、伊藤、山県などの藩閥政府を弁護し、磯野が反論した。

磯野は別段、特別の政治的意図をもって論争に加わったのではない。しかし、かれの反藩閥、反討幕派の立場は、その出自と深い関わりをもち、旧佐幕派の津山藩の反骨の気風と蘭学を経て形成された津山洋学の伝統に根

ざしている。そして、それは磯野の批判精神の重要な原点でもあった。

磯野の帰国は、前述のように一八八四年（明治一七）八月であるが、かれは汽船横浜丸の事務長として帰ることになった。注文主の三菱としては、航海業務はイギリス人船員に任せるとしても、食料品や雑貨品の購入は信頼のおける日本人に託したいという考えがあり、また、磯野もイギリスでの商務見習の目的が一応達せられたと判断して事務長の仕事を引きうけたのである。

三

英国留学から帰朝した磯野は、まず、三菱社員（郵便汽船三菱会社神戸出張所取締）として神戸桟橋の荷受所の現場監督の事務に当たった。しかし、この仕事は長く続かず、翌年一八八五年（明治一八）五月には退社している。そして、直ちに明治屋創業の準備にとりかかった。[13]

この三菱時代に注目すべき出来事が起った。小野梓からの東京専門学校（現、早稲田大学）主任教授への就任依頼である。小野梓（一八五二－一八八六）は、大隈重信とともに立憲改進党を結成したことで広く知られているが、その小野が、大隈を校長とする東京専門学校を創立（一八八二年）するや、法学部の専任教授の物色をはじめ、大学で英法を専攻し、さらに三年有半のロンドン留学の経験をもつ磯野に白羽の矢を立てた。小野は一八七四年（明治七）、他の民権派知識人と共存同衆を創るが磯野はその会員であり、早くから磯野の才能を熟知していた。共存同衆は、都市知識人を対象とした学術研鑽と民衆の啓蒙を目的とする結社である。同時にそれは、拷問の禁止、華士族の廃止、旧藩意識の払拭、愛国心の高揚など封建余弊の打破と日本の近代化の推進、そして対外的独

立を求める民権派結社でもあった。すなわち、農村中心の自由党とは異なった都市の大商人や知識階級のなかに支持基盤を見出す改進党の母体となった組織である。

民権派知識人である小野の政治思想は、共存同衆の「立社宣言」や「共存同衆条例緒言」にみられるが、ここでは、立憲改進党の「綱領」を通してその政治理念の一端をあきらかにしよう。かれらは立党の目的として、「王室の尊栄を保ち人民の幸福を全ふする事」、「内治の改良を主とし国権の拡張に及ぼす事」、「中央干渉の政略を省き地方自治の基礎を建つる事」、「社会進歩の度に随ひ撰挙権を伸濶する事」等の項目を掲げるが、政治改革を実現する方法としては、「急激の変革」を避け、「順正の手段に依て我政治を改良し著実の方便を以て之を前進するあらんことを冀望す」と述べている。そして、「順序を逐はずして遽に変革を為さん事を謀るは即ち社会の秩序を紊乱し却て政治の進行を妨害する」と暗に自由党の「急躁」、「激昂」の戦術を批判している。

実業家であるとともに、政治的実践に対しても多大の関心をもった磯野であるが、その政治的スタンスがいかなるものであったか。それは、かれが、改進党員もしくは準党員を募る目的をもって結成された共存同衆の正会員（一八七九年入会）であったことや小野の東京専門学校への熱心な勧誘をうけた事実などによって、我々はその実像を自らあきらかにすることができるであろう。

さて、東京専門学校教授への招請であるが、磯野は次の理由で就任を断わっている。すなわち、東京専門学校と競争の関係にある英吉利法律学校（のちの中央大学）発起人の有力者が親友の増島六一郎であり、かれらが推進する学校設立計画に支障をきたすことを恐れたこと、そして、宿願である明治屋創業の準備に忙しかったことなどが、辞退の理由として考えられる。[14] しかし、同年（一八八五）九月、今度は浜尾新（当時、文部省専門学務局長）からの懇請を受諾して、東京商業学校（一橋大学の前身）ならびに東京外国語学校付属高等商業学校の准奏任御用

掛となって講師の職に就く。小野の勧誘を拒絶しながら、独立の精神を説く磯野が官吏浜尾の依頼に応ずるのはいささか腑におちないが、[15] ともかく年俸一、二〇〇円の待遇で教鞭をとることになった（翌一八八六年一月まで四ヶ月間簿記、法律を教授）。

以上みてきたように、磯野は、三菱の援助でロンドンに留学し帰国後暫時、郵便汽船三菱会社に勤めたが、約六ヶ月後に退職、東京商業学校の講師をしながら、それと並行して明治屋創業（一八八五年一〇月）に向けて本格的な準備態勢に入ったのである。

かれが、独立して食料品商を営む第一歩は、一八八五年（明治一八）九月に創立された日本郵船会社[16]の船舶に食料品や雑貨などを納入する権利を手に入れた時に印された。すなわち、三菱以来、日本郵船のなかに倉庫係 Store Department があり、それが、汽船に乗り込む乗客や外国人船員のための食料品と日用雑貨を取り扱う部局として機能していた。係の担当者は専ら外国商人によって占められ、デンマーク人やイギリス人が大きな勢力をもっていた。そして、かれらは、デンマークやイギリスの商人を納入品の特約者として指定優遇し、他の商店からの納入を一切許可しなかった。このような不合理な商業取引の慣行は、もちろん、幕末の不平等条約に基づくものであるが、明治一四、五年ころからはじまった条約改正運動の進展とともに、経済上の利権回復の必要性が叫ばれ出し、それまで外国商人が独占してきた不当な利得がにわかに注目されるようになった。不平等条約によって、不利益を蒙る日本人にとって、利権回収の恰好のターゲットになりうるのがこのストアーデパートメントの存在であった。

磯野は、岩崎（弥之助）や近藤廉平（後の日本郵船会社社長、当時、三菱の横浜支店長）に積弊の改革を説き、自ら商店を設立して郵船会社の納入商店になることの承認を求めて運動した。近藤は磯野と昵懇であり、熱意と慷慨

に動かされて、ついにその要求を聴き入れ、外国人との特約を廃棄して磯野に納入を命ずることになった。横浜北仲通り四丁目に事務所を設けたのが、今日の明治屋のはじまりである。

このように、三菱の後援を得て食料品商として独立経営の道を歩みはじめた磯野であるが、功を奏するまでには多大の苦心惨憺を経験しなければならなかった。竹越は、「当時貿易の状態は、一言にして云へば、欧米の商人が横浜の港頭を占拠し、輸出も、輸入も、殆んどその手を経由せざるものなしと云ふ状態であって、直輸出直輸入の商人は、全く無しと云ふことは出来ぬが、極めて稀少且つ微力であった。此時に方りて磯野君が敢然として起ち、世界各国の市場に向かって、直接に商網を張ったことは貿易史上の一飛躍」と評している。

磯野が書いた商業書簡が今日残っているが、そのなかの一点、一八八六年六月一日付のロンドンのクロス・アンド・ブラックウェル商会 Crosse & Blackwell, Soho Square, London あての書簡に、磯野の近代的商法の一端をみることができる。[17] そこには、注文商品の支払方法、船積の条件、海上輸送航路の指定、商品の適正価格の標示等、詳細かつ明確に要求が主張されており、日本の商人によくみられた貿易業務の経験不足と知識の貧困から外国の商会のいいなりになる卑屈な姿勢は全くなく、堂々として自信に満ちた態度が貫かれている。店に働く店員の教育も実に厳しかった。出勤時刻は早朝五時と決められ、泊りこみの者を別とすれば、交通不便の時代であるから、あとは原則として徒歩、若干名が乗合馬車などを使っての通勤であった。磯野も雑務処理の他に、外国郵便の発送日が迫ってくると自ら筆を執って商業書簡 commercial correspondence を書いた。夕方、店員が帰宅したあとの仕事なので、時には、コピー役をつとめた山下鏡太郎とともに疲労のあまり仮眠することがしばしばであったという。社長自ら陣頭に立って経営努力した甲斐あって、明治屋は短時日のあいだに目ざましい発展を遂げた。

取引網は欧米諸国一円に広がったが、商品は海外との直接取引を原則とした。商品の種類も、食料品の他に、三輪車、煙草、刃物、ミネラル・ウォーター、ブラック・インキ、ポンプ等機械類の輸入にまで手を広げ、注文の仕方も、特定の商会にあらゆるものを注文せず、それぞれ製造販売面で最も得意とする各商店から品物を個別に購入する方法を採用した。

納入先も日本郵船会社以外に、一般の外国船も得意とするようになった。英国のセンチュリオンをはじめとする東洋艦隊や米国の軍艦商船が横浜に入港するたびに、納入品の一部が明治屋を経由するようになった。外国から明治屋に対して日本における代理店になることを求めてくる商社も出てきた。一八九一年(明治二四)のJAPAN DIRECTORY 掲載の広告にはジャパン・ブルワリーと平野ミネラル・ウォーターの代理店になっていることがわかる。また、英国シェフィールドのハンター商会に対して、日本と中国における一手販売権を承認するよう要求している。

磯野は、これら業務の遂行に際して、万事、直接指揮をとり、かれの「厳励精細の気象によりて養成せられたる堅実、簡易、敏活、忠直の店風」[18]が次々と取引の成功をもたらした。事業の拡大、成功とともに店舗も整備され、一八九一年(明治二四)一〇月には、横浜のメーン・ストリート本町通り一丁目に八千円の費用を投じて壮麗な西洋式の新社屋を完成、移転した。関東大震災までは横浜本店として明治屋の本拠地であった。支店も東京(木挽町、のち銀座二丁目に移転)、大阪、神戸に設けられ、門司に出張所を開いた。

四

磯野の旺盛な事業意欲は、ひとり明治屋の営業だけでは満たされなかった。すなわち、一八九五年（明治二八）、大阪に設立された日本精糖会社の創設に多大の貢献をしたことは、社長松本重太郎の磯野長蔵あての書簡にあきらかである。[19] 製糖事業の将来性を重視したかれは、国内で精製糖を生産して外国からの輸入を防止しようと首唱、大いに先見の明を発揮した。その他、天然鉱泉（飲料水）の採取、ゴム事業、保険のブローカーなどにも関係した。

しかし、磯野が最も心血をそそいだのは、右の明治屋の他に、キリンビール販売事業と磯野商会（機械鉄材の輸入事業）の設立（一八九七）であろう。かれが、キリンビールと関係をもつに至った経緯を考えてみよう。

一八七二年（明治五）、横浜で、米人ウイリアム・コープランドが事業を起した（通称天沼ビール）のが、日本のビール醸造事業のはじまりといわれている。その後、三菱系の財界人を中心とする日本人と共同で一八八五年（明治一八）、ジャパン・ブリュワリー・カンパニー（麒麟麦酒の前身）を設立した。そこで、醸造とは別に販売システムの問題が持ちあがったが、磯野は、明治屋に専売権を与えるよう働きかけた。外国人経営陣は難色を示したが、豊川良平の斡旋で一八八八年（明治二一）に明治屋に専売を委任することになった。以後、俄然、販売成績があがり、輸入ビールとの競争に打ち勝つだけでなく海外への輸出の魁をなすに至った。後年、キリンビール会社が起り、ジャパン・ブリュワリー・カンパニーの事業を継続することになってからも、明治屋は、依然として一手販売にあたり、一九二七年（昭和二）、自ら直接販売を営むまで四〇年間、不断の熱意をもって販路の開拓に努めた。販売業務の一環として、当時、未だ一般の関心が高くなかった商品の宣伝、広告業務にも磯野は実に思

い切ったアイディアを発揮した。『中外商業』はその一例を次のように紹介している。明治屋は、「其の発売に係る麒麟ビールの披露として、去る十日は横浜市中を、又去る十二日は府下各町々を三四十人にて練廻りたるが、鳴物には銅鑼太鼓等ありて、打扮には瓶形のものを体に箝め、洋刀を佩びて騎馬に乗るあり、歩行するあり、旗押立るあり、一行殆んど是瓶の行列にして、屋根船形の車に大のビール樽を載せ馬を以て曳かしむるもの之が殿となり、大に衆目を引きたるが、同店にては又博覧会（第三回内国勧業博覧会―筆者注）の開場中、上野公園桜ケ岡花山亭にキリンビールを備へ置き、殊に座敷の体裁にも心を用いたれば此に休憩して同酒の芳味を賞翫する人も多しとなり」（「麒麟ビール―明治屋の行列宣伝」明治二三年五月一四日）[20]と。

また、博覧会の時には、新橋の美人芸者ぽんたがキリンビールのうちわを使う絵を印刷したポスターを配るなど意表をつく新機軸を打ち出した。その他、売上げ向上のために、日本全国に随時、宣伝隊を繰り出し、毎日、地図を開いて宣伝隊の行く先々の位置を確認するピンをさして成果を楽しむという熱意の持主であった。とにかく、販路拡張の有効な方法として、宣伝広告の意義を正しく理解した磯野は、宣伝事業においても時代の先駆者であったといえよう。

後年（一九三一年）、麒麟麦酒は、磯野と後継者長蔵に対して、「四十年間不断の熱心と誠実を以て販路を拡張」した功績を回顧して丁重な「感謝状」を贈っている。

次に磯野商会の設立であるが、それは、日清戦争後の一八九五年（明治二八）八月から翌年五月にかけての欧米諸国巡遊後に実現したものである。日本の資本主義経済の発展と産業の振興、世界の貿易構造の変化をふまえて、それに対応するためには、従来の食料雑貨を中心とした輸入販売業務の他に、機械、鉄材を主体とする商品を取り扱う商社を起す必要を痛感した。背景には、日清戦争勃発から一九〇二年（明治三五）にかけての会社、工場の

急増、戦争の勝利と戦後経営にみられる軍備の拡充、軍需産業の近代化、官営八幡製鉄所の創設、船舶車両など重工業化の急速な進展といった日本経済の変貌があり、鉄材の国内需要が将来、大幅に増大する情勢を把握した上での判断であろうと思われる。かくして、一八九七年（明治三〇）一月、磯野商会が成立した。パートナーは、かつて、明治政府の御雇外国人であり、当時、グラスゴーに名誉領事として在住していたキャプティンA・R・ブラウンであった。ブラウンが商品の買入輸送の責任を負い利益は磯野商会と折半するという契約で事業を開始した。そして、親戚の米井源治郎と永井久太郎の二人が、協同者となり、磯野商会を三人の共同事業とした。

磯野は、この分野でも明治屋創業と変らぬ情熱を注ぎ、短期間のうちに同業者が眼を見張る業績をあげた。その一例が北越鉄道の建設にあたり、レール納入に成功した事例である。

明治二〇年代の日本は、東海道線の全線開通（一八八九年七月）をはじめとして、鉄道建設ラッシュの時期であったが、北越鉄道（新潟—直江津）は一八九四年（明治二七）五月、渋沢栄一らが発起人となって計画され、一八九六年（明治二九）にいよいよその敷設に着手した。そこで、建設に必要なレールの調達をめぐって多くの業者が激しい競争を展開したが、新興の磯野商会が経験豊かで老練な輸入商を押えて見事に落札に成功した。

落札成功の理由として、竹越は次の二点をあげている。[21] すなわち、第一点は、磯野が経営の根本原則とする薄利主義（一割以上の利益を受け取らない）の墨守、そして、第二点は、貨物船の運航径路の有利な工夫による資材価格競争の勝利である。A・R・ブラウンは、多年日本に勤務した経験から日本国内の港湾施設や交通状態に精通しており、北越鉄道敷設工事の位置から考えて、ロンドンからの貨物輸送径路として横浜経由ではなく直江津に直航せしむる方法を採用して輸送経費の軽減を図った。ところが他の輸入商は、レールを満載した貨物船を一旦、横浜に入港させ、さらにこれを他の船舶に積みかえて新潟県下に転送する方法で勘定書を作成したので、価格の

点で磯野商会に敗北を喫したわけである。また、磯野と大学の同期生であった末延道成が北越鉄道会社の責任者として業務を統轄していたことも磯野のフェアープレーの精神に立った競争を有利に展開させたといえるであろう。

このように、磯野は船舶納入業、総合輸入食料品業にはじまり、次第に卸小売業、そして、キリンビールの販売、機械鉄材の輸入業へと事業を拡大していった。明治屋と磯野商会の経営が、ちょうど車の両輪の働きをしたが、かれの飽くことのない事業意欲は、さらに大きな野心の実現に向かっていた。すなわち、明治屋の経営は終生の事業ではないこと、畢生の目的は、丸之内官有地を買収してそこに中央事業局を建てて一大事業を始めることにあると晩年よく周囲の者に夢物語を語っていたという。[22] 政府が一八九〇年（明治二三）の国会開設をひかえて、丸の内の広大な国有地を三菱に売却した（一八九〇年三月）が、未だ土地利用計画も立たず、茫々たる原野の状態であったころの話である。

また、磯野を大阪商船会社の社長として経営にあたらせる計画が、岩下清周らを中心に着々と進んでいた矢先の一八九七年（明治三〇）冬、急性肺炎にかかり倉卒に逝去した。享年わずかに三九才、麻布広尾の旧佐野藩主堀田正敦の別荘地に新築中の宏壮な邸宅の完成を見ることなく急逝したのである。

一八九七年（明治三〇）一二月一八日、若くして逝った実業家の葬儀が芝増上寺において盛大におこなわれた。参列者数百人、埋葬式が終わるまで散会しない人が二百人を数えたという。ここに、弔辞を読んだ代表者や会葬者の主な人々の名をあげて磯野の人脈の一端を知ることにしたい。友人総代として中村弥六、学士会総代として山田喜之助、そして豊川良平が毎月会幹事総代として、辰野金吾が明治倶楽部総代としてそれぞれ弔文を述べた。会葬者には、岩崎弥之助、外山正一、矢野次郎、小村寿太郎、奥田義人、都築馨六、、中橋徳五郎、柳谷謙太郎、

原六郎、相馬永胤、菊地武夫、増島六一郎、仙台貢、久原躬弦、福澤諭吉、渋沢栄一、益田孝、近藤廉平、山本達雄、牛場卓造、川田龍吉、大倉喜八郎、末延道成、犬養毅、本山彦一、岩下清周、谷井保、杉浦重剛、荘田平五郎、千頭清臣、金井延、菊池大麓、浜尾新、中上川彦次郎、高橋是清、福澤捨次郎、福澤桃介等が顔を並べている。これらの顔ぶれからみて、磯野の交友圏は東京大学の友人、三菱系の実業家、そして慶應義塾系の政治家、実業家、知識人を中心に構成されていたことがよくわかる。

五

学者や思想家と異なって、実業家、それも磯野のように、事業半ばにして倒れた人物の場合には、本人自らが系統的に書き残した思想の表明やまとまった伝記史料に乏しい。

それゆえ、事業の軌跡をフォローしたり、磯野と関係のあった人々の思い出、感想、論評等をたよりにかれの人物と実業の思想を理解する他はない。磯野を語る記録はやはり、かれの死亡の時点において集中的に表われた。

まず、中村弥六の弔辞からみていきたい。中村は、第一に、磯野が何よりも時流に逆らった生き方をした人物であることを次のように強調している。「当時学者猶封建時代ノ余習ヲ承ケ官仕ヲ高シトシ民業ヲ卑シトシ殊ニ商業ニ至リテハ徒ラニ末利ヲ事トスルモノナリトノ思想未タ脱セスシテ学者ノ為スヲ屑シトセサル所ナリシニ係ラス君末延道成氏ト共ニ却テ商業ヲ択ヒ以テ君カ異日ノ基ヲ定メタルノミナラス増島六一郎高橋一勝二氏ノ代言事業ヲ択ヒタルト共ニ旧来ノ迷想ヲ破リ学者ノ好尚ヲ一転シタルノ功少ナカラサルナリ以テ君ガ識見ノ時流ニ同シカラサリシヲ見ルヘシ」[23]と。官尊民卑の風潮の強い明治日本にあって、大学出身者でありながら官吏にならず、

実業界、それも自ら個人商店の経営者となった磯野は、まさに竹越がいうように「唯一のパイオニーア」であろう。幕府が倒れ、明治新政府の時代になって西南雄藩の下級士族出身者が政権を掌握したが、近代国家の行政実務の経験に乏しいかれらは、東京大学出身者を官吏として用いる必要に迫られた。明治政府は、急速に行政官僚の養成を図るために、「国家ノ須要ニ応スル学術技芸ヲ教授シ及其蘊奥ヲ攷究スル」（「帝国大学令」第一条）目的をもった帝国大学創設を実施せざるを得なかったのである。したがって、明治初期は書生得意の時代であり、そのような状況のなかで、磯野が決然と一商店の経営者の道を選んだのは、あたかも「春雁が花に背いて北地に帰るが如くに、之を観た」知人が多かったという。[24]

磯野の事業の成功を先見の明とともにその性格に由来することを強調する見方もある。すなわち、中村は、「資性堅忍ニシテ急進ヲ好マス漸進ノ方針ヲ執リ其創業ノ当初ノ如キハ経営苦心蓋シ名状スヘカラサルモノアリシト云フ当時君カ一商舗ニ起臥シテ平然タルヲ見人或ハ其堂々タル学士ノ身ヲ以テ何カ故ニ然カク賤業ニ従事シテ自ラ苦辛スルヤヲ怪ムモノアリシト雖君ハ笑テ顧ミサリキ」と記しており、清水承吉（法学士。磯野に親しく接して指導をうけ明治屋から招請されていた人物）も、磯野が、「時流ノ滔々タルニ反シ率先身ヲ実業界ニ投シ刻苦経営外商ト桔抗シテ海外貿易ノ発達ヲ計リ誠実営務以テ本邦商人ノ地位ヲ進捗セシメンコトヲ志シ世上売名ノ徒カ自ラ揣ラスシテ徒ラニ筆舌事ヲナサントスルヲ憤慨シ躬自ラ実践躬行ヲ務メテ事ニ着実慎重事トシテ功ヲ奏セサルナシ」と「丈夫ノ本領」を発揮した点を力説している。

明治屋の店員として、あるいは、外国語学校で直接、磯野から教えをうけた人々の寸評はより端的にかれの人物をとらえている。

直情径行、剛情、癇癪もち、潔癖さと同時に温顔包容、親切、仁愛、そして自らを律する廉正さをもつという

評価が多くの人々によって指摘される特徴である。他社に先駆けて最新式のタイプライターを導入したり、店員にチェンバーではなくロングマンのペンマンシップを習うことを強要、習字の訓練については、磯野自ら少年の手をとって指導するという丁寧さであった。商業書簡の書き方や外国語の発音の矯正など、実務を教える場合にも実に厳しく委曲をつくして説明した。そして、時に、自己の経験談や道徳的説話、実業の心得などを説くことも忘れなかったという。[25] 磯野が与えた教訓の一つに、教え子の各務兼吉に語ったという次のような談話がある。

実務に従事するにあたり必要な心がまえは、人に使われるものと考えないで、事業に使役せられるものと観念すること、事業が己を使役すると思えばまた別種の心境が開けるであろうという興味深い話がある。思うにそれは、おそらく、事業経営における封建的な上下主従のモラルが未だ濃厚に支配する明治日本において、近代的な西洋の学問と実業を学んだ若者が、実社会に出て必ず直面する難題が、因襲的な経営者との人間関係から生ずるトラブルであることを配慮した忠告であろう。

しかし、後進への個人的配慮というパースナルな動機を超えて、そこには、人（煩瑣な人間関係）よりも物、仕事や事業自体に対する忠誠、情熱が吐露されており、磯野の近代的な実業の精神の一端が垣間見られる。

要するに、剛情、剛胆にして驕慢不遜に流れず、廉直、潔癖にして狭量に陥らず、細心にして放胆、合理的にして道徳的教訓を愛する国士風の器量が、磯野を知る多くの親友知人から厚い信頼と援助を獲得する要因たりえたのである。

六

竹越は磯野の実業の思想にふれて次のように述べている。磯野が事業を始めた明治一七年ころの商業社会は、未だ封建時代の町人の遺風を固守し、因循、姑息、掛け引き、ごまかし、不正確な商品の受け渡しといった現象が普遍的であった。それと並行して、近代国家としての制度が整備され、行政権が強大になるにつれて、官憲に阿諛追従して「徒手空拳、巨利を図らんとする新しき弊風」が表われ出した。もちろん、有能な人物もいたが、かれらは、横浜や神戸に在留する外国人の注文や言動によって外国の需要の状況を知るいわゆる「耳食者流」であるので、世界の通商貿易市場の実状を正確に把握する方法をもたなかった。ところが、磯野は、大学で当時としては最高水準の教育をうけ、世界経済の中心地であったロンドンで、食品輸入業の実態や複式簿記、その他船舶納入全般にわたる実務を実地に習得して商才を磨いた。そして、アングロサクソン的市民精神の精華である「ミッドルクラスの自由、独立、自治の精神」、「官民平等」と英国商人の信義をつかんだ。この英国流の近代合理精神と少年期に津山藩の格式高い武士の子として四書五経を学び、儒学の教養によって培われた士魂が結合して、ここに、「日本が最も必要とする士魂商才の一人物を鬱生」したのである。(26)

磯野を以て士魂と商才を兼ね合せた人物とする見解は、竹越によれば、実は福澤諭吉の磯野評に由来するものらしい。竹越の磯野伝が根拠になって流布した福澤と磯野の密接な関わりは、管見のかぎりでは、未だその客観的事実を第一次資料に基づいて確認できない。

竹越は、たとえば、磯野のロンドン行に際して、福澤が築地の料亭寿美屋で壮行会を開いたというのは鎌田栄

吉の談として引用している。その他、福澤の磯野評はすべて福澤門下生からの聞き取りの資料である。しかし、その創業者精神は無論、磯野の人脈に注意するとき、たとえば、豊川良平、荘田平五郎をはじめとする慶應義塾卒業の三菱系人脈との交流や、磯野家の後見人として明治屋の事業管理に携わった米井源治郎など慶應義塾系統の人々の占める比重はきわめて大きい。したがって、磯野の実業の思想の形成に福澤とその門下生の影響があったことは容易に察せられる。しかし、福澤が直接、磯野を評した資料が少なくともこれまでに公表された文献にみられず、また、書簡の交換など未確認の現状では、両者の交渉は傍証に基づく推論の域を出ない。

さらにもう一点、磯野の近代精神を理解する上で無視できないのは森有礼との関係である。森は磯野の夫人福子（静岡県士族、旧旗本広瀬秀雄の第三女）の長姉阿常と結婚しており、磯野とは義理の兄弟の間柄になる。磯野の結婚は一八八五年（明治一八）で、文相森が明治憲法発布の当日（一八八九年二月一一日）、西野文太郎に刺されて翌日没するまで三年有半、二人は義兄弟としての交わりがあった。森の妻阿常と福子はいずれ劣らぬ聡明な女性であった。森は、一八七五年（明治八）二月、東京都知事大久保一翁の面前で福澤諭吉を証人として、当時としては珍しい三ケ条からなる「婚姻契約書」を交換する結婚式を挙げたことは周知の事実である。[27] その森が、義妹福子を近代教育をうけた模範的な婦人の典型として、伊藤博文に紹介したエピソードを竹越は記している。[28] 啓蒙思想家として女子教育に熱心な森が、新教育をうけた理想的な才媛として推奨した福子は、外国宣教師が立てたキリスト教の女学校で教育をうけた。キリスト教が未だ一般世間で異端視されていた時代に、磯野が私生活において妻福子からうけたキリスト教的感化の意義は見逃せない。

二人の結婚生活は短くわずか一年未満で終わった。福子は長女菊子を分娩後、二二才の若さで亡くなった。葬儀はキリスト教の儀式に従って営まれている。

福澤とその直系の門下生たち、森有礼、そして、修学、思想形成期に影響をうけた箕作秋坪、麟祥と数え上げれば磯野と交流のある人々は、いずれも洋学者であり明六社系統の思想家であることに改めて驚ろかざるを得ない。それに加えて、未だ殺伐な蛮カラムードの支配する大学南校、東京大学時代の教師や学生仲間から得た影響ははかり知れない。

明六社の思想家は、自由民権思想家たちのように、関心対象を一局集中的に政治改革に限定するのではなく、広く教育、思想、風俗習慣、道徳問題から生活改良問題までとりあげて、精力的に封建的な身分秩序の否定と古い伝統的思考の枠組の批判をおこなった。磯野はこのような明六社系の思想家たちの影響下に、封建的な商人気風の打破とそれにとって代るべき「独立、自由、公明、正大を主義とする商務」を起して、実業の世界で成功を収めることを期して報国の道を説いた。しかし、磯野の場合、日常生活を通してみられる生活の質に注意するとき、よく志士的気概の持主にありがちな禁欲的姿勢はない。明治屋の創草期、経営が苦しい時には家計は質素であったが、事業が軌道に乗るや家にコックを雇って美食するようになった。また、家財道具も趣味豊かな高価な品物が蒐集された。芝居見物も盛んで、親戚、朋友、店員などを招待して豪勢に見物をしてまわった。観劇を趣味とするのは、竹越にいわせると東京流というよりもむしろ「ロンドン風の翻訳」ということになるらしい。しかし、夜間、通りを流して歩く新内を呼びこんで一曲所望するという「伝統」趣味もあった。

その完成を見ずに亡くなったが、「林園、池水を抱擁し、水鳥が飛べば浦葉が翻がへり、魚が躍れば荷花が動き、径を行けば紫蔓が道を遮り、林に入れば緑糸が樹枝を縫ひ、封建侯第の大と、隠者茶寮の幽とを兼ねた都下名園の一[29]」たる旧佐野藩主の旧邸を買収して豪華な和洋折衷の邸宅工事に着手するなど豊かで充実した私生活をエンジョイすることも決して忘れなかった。

磯野は、一八八四年（明治一七）に帰国して一八九七年（明治三〇）に死去したのであるから、実業人としての生涯はわずか一三年に過ぎない。もしかれにあと二〇年の生命が与えられたならば、恐らく大実業人としての生涯を完成しえたであろう。しかし、磯野にとって、最終の目的は政治の世界に雄飛することにあったといわれる。日清戦争当時、上海に反日気運が醸成され、清国軍隊に対する軍需品の供給や外交上の陰謀が企てられるや、諸外国の対日制裁を恐れず、大胆に、速かに上海を占領して禍根を絶つべしと直言して周囲を驚かせた。また、明治初期の外国人商人の利権の専横を憎み、かれらの勢力を排除して日本人の手に商権を回復することが創業の基本動機であると主張するなどナショナリズムは磯野の言動を一貫するエトスであった。

ともあれ、早世によって政界への夢は断たれた。しかし、「丈夫たる者須らく独立して事に当るべし」（「梧堂言行録」中の磯野のコトバ）をモットーに、「新興社会のチャンピオンとなった一事でも、その名は永く明治経済史に留まるべきもの」としなければならないという結語で竹越はその伝記を締めくくっている。

七

筆者は、竹越三叉の著述を手がかりにして磯野の実業の思想と行動の概略を考察してきた。近代日本における実業の思想を語るとき人々の関心は渋沢栄一、岩崎弥太郎、あるいは磯野と同時代人であれば、中上川彦次郎や武藤山治らのポピュラーな経済人に集中し、それらの人物に関してはすでに著作集や自伝の刊行、伝記編纂など資料も豊富である。しかし、磯野の場合、社史資料や『明治屋百年史』といった社内資料の他には、公刊された文献としては竹越の伝記が唯一のものといえるであろう。だが、その竹越の著書も前述のように必ずしも客観的

な資料的根拠に基づく「正史」的研究とはいえない。関係者からの聞きとり、書簡の解読、経歴書、日記メモ類を中心に人物像を作りあげたのであって、三叉独特の名文で一気に読ませる技巧はさすがと感嘆させられるが、たとえば、福澤との関係の論証ひとつをとってみても資料的フォローは直接的ではなく傍証に傾斜している。

また、小野梓の招請を断わって、浜尾新の場合、受諾した動機の分析もない。晩年の政治家志望にしてもその叙述は説得力に欠けるといわざるをえない。

しかし、本書はあくまでも竹越の手に成る思想史的人物評論であり、個々の事実を網羅的に調査したり、厳密に客観性を追求する伝記の完全版をめざしたものではない。むしろ、磯野を通して、近代日本が内包する問題の所在を明白にする意図をもった著述であり、その意味で、モチーフが非常にはっきりした磯野論といえるであろう。

竹越が主張したかった論点は、これまでに小稿で随所に論及されていると思うが、繰返しを厭わずにいえば、中心の論点は、やはり竹越の人生の師でもあった福澤が評したといわれる士魂と商才の結合という問題であろう。廉恥、誠実、節義を尊ぶ武士道の精神をもち、国家社会の木鐸としての器量を備えた人格が士魂の具体的なイメージであるが、竹越にとって、このような士魂と分離した商才は、いわば脊椎分離症ともいうべきもので、到底、それは、近代日本の資本主義的発展を担う産業資本家の理想像とはいえない。そこには、政府の富国強兵や殖産興業政策と結託した政商として巨利を博するのではなく、また、天下国家の公的意識と無縁にアナーキーに商才を発揮するのでもなく、いわば商才の発揮を内在的に動機付けるものとして、前近代的価値である士魂を活用しようとする意識が働いている。

竹越は、明治維新の変革において武士層の役割を高く評価しない歴史家である。むしろ、庄屋名主層の反権力

の姿勢に注目し、かれらこそ「幕府時代に於て民権の一大城塞」（『新日本史』）であったと論じている。そのかれが、儒教的エトスと深く関わる士魂、武士道という伝統的価値それ自体に積極的な意義を見出しているとは考えられないが、磯野論における士魂商才論には、渋沢栄一の論語や武士道の読みかえに通ずる一種の折衷主義（エクレティシズム）的発想がみうけられる。(30)

そしてまた、それは武藤山治の『実業読本』に展開されている実業の精神との顕著な類似性をもつ。武藤は周知のように国民倫理基準の形成に苦心した経済人であるが、かれのみるところ、わが国は明治維新以来、外形において長足の進歩をとげたが、「古来武士の間に存在した武士道」を失うという「内面的の犠牲」の上に物質文明に向かって狂奔した。その結果、社会全般にわたって様々な欠陥が生じている。それゆえ、目下の日本国民にとって重要な課題は、「外形にあらずして内面」すなわち「物質にあらずして精神」的基盤の確立にあると言明した。(31) そこで、武藤は武士道に代るものとして唱道したのが実業精神に他ならない。ここで我々が注意しなければならないのは、かれが実業精神という場合、それを広義に解釈して国民精神のバックボーンとして機能する道徳心としてとらえていること、そして武士道に代替するものとしての実業精神といっても、武藤は、武士道や武士の精神がもはやアウト・オブ・デートなものであるという考え方には立っていないということである。むしろ、武藤が主張する「国民日常の行ないを律する道徳心の規範」となるべき実業の精神の具体的な中身になるとたとえば、「積善の家に余慶あり」という易経の一句を引用して、さらにそれを「困苦精励正しき手段にのみよりて富める積善の家に余慶あり」といいあらため、手段方法を選ばずに公益を顧みずに致富の道に奔走することは厳に慎まなければならないと力説している。かれ曰く、「いやしくも実業に従事するものは、正直で真面目であること、昔の武士の精神のごとくあらねばならぬ」（傍点筆者）と。まさに渋沢の「論語と算盤（そろばん）」と同じ発想である。

さらに、実業の精神の項目として武藤は以下の徳目をあげている。自尊心、自制心、自治精神、博愛の精神、卑屈心の排除、品性、理想、研究心、温情主義的工場経営法――かれは福澤（「公平の論は不平の人より出ず」）と新島襄（「憎んでは打たぬものなり笹の雪」）の訓話を紹介しながら「使う人と使われる人」の心構えを説く――、責任観念、協同の精神、失敗は成功の因、蓄財の秘訣、人生の真実の意義――社会全体への奉仕に真の人生の充実感を見出す精神の涵養等々がそれである。これらの実践倫理を西洋、とくに英米国民の倫理観念をモデルにしながら論述している。引用される人物もイエス・キリスト、ウエリントン将軍、J・ブライス、S・スマイルズ、B・フランクリンそしてボールドウインやマクドナルド、アスキスら一九一〇－二〇年代に活躍した多くの英国の政治家など多彩である。

また、源義家が安部貞任を衣川の関に攻略したときに示した戦国武士の「情味」ある品性――義家が矢をつがえて一矢を放たんとするとき「衣の楯はほころびにけり」と詠んだところ、貞任が「年を経し糸の乱れの苦しさに」と返歌を送ったのにこたえて、矢をはずして追撃を見合わせたという美談の紹介――、近松の浄瑠璃本や鶴屋南北の芝居にみられる「博愛の精神」や日本武士の「責任観念」の強さなど、古今東西の事例が時代の違いや文化的脈絡を考慮せずにアトランダムに紹介されている。しかし、アングロサクソン的市民精神と封建制の身分的階層秩序ではなく日本武士の精神の結合されたものが武藤の説く実業の精神の中核であるといえるであろう。このような見地からドイツ的気風――第一次大戦を惹起したドイツ国民の覇権主義と「粗豪驕慢」を批判――と長い封建制の下で育成された日本人の独立心の稀薄さ、卑屈心が鋭く批判されているのである。

なお、武藤は一九二三年（大正一二）大阪に実業同志会を創り、議会政治確立の「国民覚醒運動」のために代議士となって政治運動に身を投じる。実業家が専ら事業の経営に努めるだけでなく「国民思想の善導」を図り、政

治腐敗撲滅のために骨折ることは「公民の義務」と考えるその姿勢は、大正期の竹越の政治思想とも一致する。両者の個人的接触の深さについては詳かでないが、思想的立場の共通性に注目しておきたい。

竹越は一九一五年（大正四）三月、衆議院総選挙に敗北を喫してのち、五年有余の歳月をかけて大著『日本経済史』全八巻の執筆に没頭する。朝吹英二が委員長になって「日本経済史編纂会」が組織され、そこが刊行母体になるのであるが、その編纂会のメンバーに武藤も池田成彬、和田豊治、森村開作らと共に名前を連ねている。編纂会成立後、四年五ヶ月のあいだ「一切の世事を謝して、書局に蟄居し、新聞雑誌記者の来訪をすら謝絶（中略）、毎朝八時半には書局にあり、夜間、枕頭に開く所のものまた史料、古文書にして、之がため余の視力は急速に衰弱」する程の刻苦勉励ののち漸くにして『日本経済史』第一巻を上梓した（一九一九年一一月）。

この書物は文字通り、経済史を中心にした総合的な日本歴史の把握をめざしたものであるが、日本経済史執筆の方法論上の問題に論及して次のように述べている。すなわち、近年、社会主義の影響をうけて、「専ら経済的に史実を考察しようとする一道の潮流」あり、そして他方「欧米の学者の経済史の体態（ママ）を模するに汲々として新手を出すもの」なしという経済史の学問的方法の未確立に言及して、自らの接近方法の正当性を訴えている。欧米経済史家の方法を模倣する一派は「唯、税制や貨制や、田制等を個々に記述するに止まり、それが国民の生活や、思想や、政治に如何なる影響を生じたかについて、綜合的に議論するもののないのは余の甚だ遺憾とする所である。是れ支那に於て、九通の名に於て、古来已に久しく為された事業であって、何等の新し味もないことである。余は此書の如く史実に経済的解釈を加ふることが、今後経済史の正当と云はざるも有力なる形式となるであらうと云ふことを信じて疑はぬものである」（『日本経済史』改訂普及版に題す[32]）と。

歴史研究において、対象の個別の記述に満足するのではなく、個々の事物の相互の関連を解明する必要を説く

竹越はここで自ら史論ないし史論家の定義を下しているといってよい。

それは、福澤が「学問の要は、唯物事の互に関り合ふ縁を知るに在るのみ。此物事の縁を知らざれば、学問は何の役にも立たぬものなり」（「福澤文集巻之一」）と学問の目的を論ずる姿勢と見事に符合する。この考えを歴史を学ぶ場合にあてはめて、さらに福澤は次のように述べている。「数百巻の歴史を読みて国王歴代の系図を詮索し、武将勇士の功名を記るし、之を暗記し、之を暗誦するも、天下古今人事の成行を知らず、其互に関り合ふ因縁を知らざれば、唯、無益の骨折たるべきのみ」（同上）と。家永三郎は、「歴史発展の大勢の裡に一定の理路を見出し、この理路に則って史実を理解することに歴史認識の意義を見」る法則的体系的認識への志向を福澤の文明史の特色としている。[33]

さて、竹越の経済史論にまで筆を広げたのは、ここで野心作『日本経済史』の特徴を正面から論ずることにあるのではない。

明治初期の啓蒙思想と文明史の伝統を継承する民友社系民間史学を代表する竹越の史論（経済史観）と人物論の関わり、すなわち、歴史のなかにパーソナリティの働きを生かそうとする意欲[34]が、『日本経済史』はもちろん、初期の代表作の『新日本史』や『二千五百年史』にも一貫して流れていることをここに再確認しておきたい。そして、小冊子とはいえ、『磯野計君伝』も竹越の他の一連の史論と共通の基本動機に基づく作品であること、すなわち、特定人物の個性描写が、常に、より包括的な近代日本の歴史的発展に働いた経済的要因は何かという問題関心の枠組においてとらえられていることを見過してはならないのである。

注

（1）長幸男編集・解説『実業の思想』現代日本思想大系11「解説　実業の思想」七ページ、筑摩書房、一九六四年。

(2)(3) 同書一二-一三ページ。

(4) 『法学士商人をめぐる明治の群像—「磯野計君伝」増刷に際して—』一〇-一一ページ、創業百年史編纂委員会、明治屋本社、一九八五年。

(5) 丸山真男『「士魂商才」をめぐって』(書評・対談)『思想の科学』1、四七ページ、中央公論社、一九五九年一月。

(6)(7) 竹越與三郎『磯野計君伝』五-七ページ、明治屋、一九八五年。

(8) 同書一一ページ。

(9) 増島六一郎は碑文で次のように述べている。竹越も共鳴し参考にしたと考えられる一節である。「回顧明治六年際　開成学校竝登第
蛍雪分光如弟兄　爾汝之交金蘭契　後入英国法律科　切磋琢磨培根柢　英法独攬事物精　克誨処世之要諦　一理貫而一言穿　事理透徹不
敢戾　由是達得独立真　自由自適仍自制　神州男子期自営　愧頼宦府徒揺曳　望塵而拝彼何人　我輩只合排其敝　自主之念終始堅　職従
弁護意最鋭　東京攻法館成時　天下一斉側目睨」(「題法学士磯野計君碑」)。

(10) 『法学士商人をめぐる明治の群像—「磯野計君伝」増刷に際して—』九二ページ。

(11) 『明治屋百年史』第一章創業の時代、一七ページ、明治屋創業一〇〇年史編纂委員会、一九八七年。

(12) 『磯野計君伝』二三ページ。

(13) 『明治屋百年史』二ページ。

(14) 同書二七ページ。

(15) この点に関して拠るべき資料に乏しいが、竹越は簡単に「浜尾新君から懇々と依頼せられた為」とコメントしている。それに加えて、当時文相が、磯野の義兄にあたる森有礼であったというパーソナルな事情もあるいは関わりをもったかも知れない。いずれにせよ、民間から官界に入る誘惑に駆られたという通俗的な解釈はあたらないであろう。

(16) 日本郵船は、郵便汽船三菱と共同運輸会社が合同して成立した会社であるが、合同が実現するまでにはさまざまな紆余曲折があった。つまり、三菱の独占的な航海権の掌握に対する益田孝、浅野総一郎らの反発や三菱と大隈派の連合に対する長州閥の策動、とくに品川弥次郎らの動きで政府の援助も加わって共同運輸会社が創設され、それにまた、自由党の一派が大隈派攻撃のため共同運輸のために奔走するといった複雑な抗争の構図があった。この両汽船会社の激しい競争のために、双方深刻な打撃を蒙むる破目におちいり、その結果両者の互譲と政府の介入によって合併が実現した。しかし、日本郵船の重要ポストは三菱系の人脈によって占められ、実質的には三菱派の勝利に終ったといわれている。

なお、福澤諭吉はこの問題に多大の関心をもち、『時事新報』紙上にたびたび論評を掲載している(社説「蒸気機関の事を記して併せ

て三菱共同運輸両会社に論及す」明治一七年三月六－一三日、「日本郵船会社の紛紜」明治一八年一二月九日、「日本郵船会社の事情如何」明治一九年一月四、五日）。

(17) 『磯野計君伝』三四－三六ページ。

(18) 同書四一ページ。

(19) 同書四五－四六ページ。

(20) 『法学士商人をめぐる明治の群像―「磯野計君伝」増刷に際して―』六二ページ。

(21) 『磯野計君伝』五三－五四ページ。

(22) 同書五六ページ。

(23) 「故法学士磯野計君履歴」（金井延）『学士会月報』第一二一号、六－一一ページ、一八九八年三月。

(24) 『磯野計君伝』六一ページ。

(25) 同書六四－六五ページ。

(26) 同書六七ページ。

(27) 森は「妻妾論」（『明六雑誌』一八七四年五月）等で、夫婦のあいだの権利義務関係の確立を訴え、両者平等の新しい夫妻のモラルに関心を示して婚姻法の制定を説いている。ここでいう契約三ケ条もこの主張に基づいており、夫婦の共有財産は無断で処分してはならないこと、もしどちらか一方が「約条」に違反する行為をおこなった場合、「官に訴えて相当の公裁を願ふことを得べし」という内容が盛られている。このいわゆる契約結婚は、維新直後の封建的男尊女卑の慣習が濃厚な時代にあって、世間で随分話題になった。なお、森は一八八六年（明治一九）一一月に離婚、離縁約定書を取交している。

(28) 『磯野計君伝』四三ページ。

(29) 同書五五ページ。

(30) 渋沢は、儒者、とくに朱子学者の罪は孔子の教義において、貨殖富貴と仁義道徳とは相容れないものとする論語解釈を推し広めた点にあると力説している。すなわち、論語の「富と貴とはこれ人の欲するところなり。その道をもってせずしてこれを得れば去らざるなり。貧と賤とはこれ人の悪むところなり。その道をもってせずしてこれを得れば処らざるなり。」（傍点筆者）という一節をとらえて、孔子は「富貴に淫するものを誡められた」までで富貴それ自体を厭悪したのではない、正しい道理を踏んで得た富貴であれば支障はない、要は絶対的に正当なる富貴功名の価値を説いているのであって、善悪にかかわらず「致富」を全面的に斥けたのではないとかれは解釈した。そして、孔子の本質は一介の道学者に非ずして堂々たる「致富経国の大本」を得んと志す経世家たる点にその本領があり、「貨殖の道は経

世の根本義」であるから、もし孔子が政界に志を得たならば「貨殖の道を外にして経世の方法はないからかならず貨殖を重んじていた」にちがいないとの確信を示した。これは渋沢のいわゆる「論語と算盤」論の一端であるが、かれは、このように、伝統的タームの意味内容を転換することによって、千古不磨の聖人の教義である論語を「旧道徳の残骸」、「旧時代の遺物」視することなく明治の「今日に処して今日に行ない得らるゝところの処世訓言」として活用するための機能転換を試みたのである（『青淵百話』『実業の思想』一三四－一三九ページ。

(31) 武藤山治『実業読本』一九二六年、日本評論社　『実業の思想』一八〇ページ。

(32) 西田毅編集解説『竹越三叉集』民友社思想文学叢書4、四四七－四四九ページ、三一書房、一九八五年。

(33) 家永三郎「啓蒙史学」松島栄一編『明治史論集(一)』明治文学全集77、四二三－四二四ページ、筑摩書房、一九六五年。

(34) 竹越は、歴史記述における「人物」並びに「人物の心理的解剖」の占める比重の大きさについて次のように論及している。すなわち「人物社会を離れて、其思想若しくは法制、若しくは議論のみを知らんとするは一種の空想」であり、「故に歴史家は第一に古代の社会に存する人物をして、躍然紙上に現れしめざるべからず」と。『新日本史』中巻「新日本史に題す」前掲『竹越三叉集』七四ページ。

（一九九一年一二月　英国オックスフォードの寓居にて。）